

「子どものいない学校を見て…」

バスはいわき市豊間地区に入り、岩陰に「津守神社」があり、その前を通過した直後に開かれた海岸の町広がった。その時「ここが、私の家があった敷地です。」と案内解説。そのガイドは、遠藤雅彦(経済2006卒)さん(関西県外避難者の会 福島フォーラム)バスに同乗し被災地を説明する青年の声でした。

いわき市豊間地区の海岸はこの村の美しい海水浴場であったが、あの3月11日の15時07分の津波以降、防波堤は崩れ、海岸線は70cm地盤沈下している。勿論、この村の家屋は押し流され、今は家が立ち並んでいた跡を示すコンクリートの土台だけが残る。当時の故郷の景色はもうない。

バスの車窓から見えるのは、遠藤君の家の門柱と屋敷跡だけだ。むごい、恐怖、恐ろしさが襲う。

さらにバスは進み、村の南外れにある豊間中学校跡に着く。グラウンド、校舎、校庭には、生徒たちの歓声はない。学校には、あの時以来主役の子どもたちがいない。今、グラウンドは、瓦礫が積み上げられ、校舎には壊れた窓、生垣や塀は壊れている。村がなくなれば、学ぶ生徒たちもいない。あの故郷が廃村状態だ。大震災から17カ月が経つ。村の復興は全く被災当時のままだ。

国は、村の跡地は「緑地帯」にするという。住民の移転先は高台と提案するが、地権者との話が纏まらない。住民は日々不安に過ごしていると言う。この地区は、3重の被害に会っている。地震、津波、そして、原子力発電所の被爆だ。故郷をなくした住民の悲劇は痛いほど解るが、その故郷をなくし、友と離れ、共に遊んだ学校もない子供たちの将来の不安定さは、どう責任を取るのだ。

さて、この大震災から、「何が身を守ったと言えるのか」の質問に、遠藤雅彦さんは答えている。

◎「何かあったら遠くへ逃げなさい」と、亡くなった祖母の言葉と言い切る。

◎避難について決断できるように教えてくれた教育。

◎地震と津波に関する教養(知識)。

◎避難準備を優先した行動。

と言う(遠藤さんの被災地案内メモより)。

東北被災地復興応援ツアーに「福島県Cコース」を選んで、多くを学びました。

1945年の広島、長崎の被爆体験をした日本が、66年後に再び原発被害で、故郷をなくす国民を作るとは、あの悲惨な戦争体験、特に被爆体験から何も学んでいないのか。その後の度重なる大震災の教訓がどこに消えてしまったのか。現地の校友の言葉から「今ここで生活することは、日々戦いだ。」と。そして、「この東北の被災地を忘れないで下さい。」と絞り出す訴えが心に突き刺さった。

また常磐スパリゾートハワイアンズ下山田敏博総支配人から震災から今までの再建活動の詳細を学び、常磐ハワイアンズの震災被害と復興の努力とフラガール達の全国研修ツアーとその成果を知った。

ここ関西での毎日の普通の生活は、決して当たり前のものではないことを知った。